

熊本県立大学文学部日本語教育課程について

馬 場 良 二

0. はじめに

熊本女子大学文学部に日本語教師養成のための副専攻課程、日本語教育課程が設置されたのは1988年、昭和63年でした。かれこれ17年がすぎようとしています。日本語教育課程はどうなっているのだろうかあとと思っている方もいらっしゃるかもしれませんが。

この雑誌をご存知のとおり、熊本県立大学文学部日本語日本文学会の機関紙『国文研究』であり、研究論文を載せるものです。ここ何年も何も書いていないから、そろそろ何か書かなくてはいけないのですが、書けるような研究をしていません。そこで、私が担当している日本語教育課程について、研究ではないが、書かせていただくことにしました。

1. 「日本語を客観的に見る力を養う」と「プロ意識の養成」

現在、私の掲げているモットーは「日本語を客観的に見る力を養う」と「プロ意識の養成」です。日本語教師となって授業を行うための知識は膨大で、すべてを伝えることは不可能です。第一、これだけ覚えれば授業ができるようになる、といった知識の集合というのは存在しません。何であれ、勉強すればするほど、また、教えれば教えるほど疑問は多く、大きくなるものです。そこで、疑問が多く、大きくなっても、自分で考え、解決できるよう、「日本語を客観的に見る力を養う」ことをモットーとしたわけです。学生たちは日本語で会話し、思考の道具としていますが、その日本語を客観的に分析したことはありません。言霊である日本語を客観的な分析の対象とすることは至難のわざです。それができるように、刺激を与えています。

日本語教師というのは論文を書きたがりません。論文を書くのがきらいな人が教師になるのかもしれませんが。一方、日本語教育学会で発表する博士課程の学生を見ると、この人は学習者のためではなく、自分の研究のために授業をしているのではないかと思うことがあります。

日本語教師は毎日学習者とむきあっています。日本語の不明な点、未分析な事象に

ぶつかります。それを勉強し、なんとか説明できるようにします。が、その成果を誰にでも分かるようにまとめる、ということをしなないのです。誰も気づかなかったこと、どこにも書かれていないことを解明、あるいは、発見した時、それを誰にでも分かるようにことばをつくってまとめあげるのが論文です。授業のエキスパートたちはこの作業をしたがりません。しかし、みつけたことをわかることばで発表する、ということをしなかつたら、日本語教育のレベルの底上げはかないません。プロの日本語教師の条件の一つは論文を書くということです。

また、日本語教育というどうしてもボランティアっぽくなってしまいます。国際交流の延長で、お互いの文化を知り、仲良くなることが最終目的、となってしまう傾向にあります。学習者は日本語教師に「言語の教授」を求めているわけで、文化の紹介や友人となることは身の回りの他の日本人でもできることです。自分の楽しみのために外国人に接するのではない、学習者の望むもの、ことを与えることができるよう努力をおしまない、そんな日本語教師としての心構えも教えているつもりです。

2. 履修単位

1988年度設置当初は、国文、英文両学科に開かれた副専攻課程でした。1999年度から日文では主専攻扱いになり、日文の学生は日本語教育の演習と特殊研究、卒論を履修し卒業できるようになりました。

一年次に日本語教授法の授業を履修する学生は、学科定員40名中、日文は30名強、英文は10名弱でしょうか。日本語教育で卒業論文まで書く学生は3名から6名程度でしょう。日本語教育で卒業論文を書く英文の学生は1名いるかいらないかです。

課程履修のためには48単位が必要です。日本語の教授に関する知識・能力は30単位分の科目があり、うち10単位を選びます。日本語の文法が2単位、言語学的知識・能力は10単位分の科目があつてうち4単位、言語の構造に関する体系的・具体的な知識は10単位必要です。外国語に関する知識・運用能力が8単位、人間と言語、世界と日本は全学共通科目と文学部共通科目から合わせて8単位、教育学的な科目は20単位分の科目から4単位、情報処理は8単位分の科目から2単位が必要です。48単位というとずいぶん多いように感じますが、日本語の文法は日文の学生の必修科目ですし、英文の学生にとっても卒業要件となります。言語の構造に関する体系的・具体的な知識というのは日文、英文の専門科目のことですし、外国語に関する知識・運用能力というのは外国語科目のことで、文学部の学生であれば、特に気をつけていなくとも、卒業までには取得しているはずです。また、情報処理の2単位も、日本語教育に関係な

くほとんどの学生が取っています。つまり、48単位と言っていますが、文学部に入ってきた学生が卒業するために必要な科目を履修していれば自然に取れてしまう科目がほとんどで、日本語教育課程のために必要だと思われる単位は、教育学的な科目の4単位と日本語の教授に関する知識・能力の10単位、合計14単位だけだと考えていいでしょう。この14単位もすべて卒業要件に換算されます。

課程が設置されたころは28単位が必要で、そのほとんどが卒業要件になりませんでした。当時は学生の負担が大きかったようです。今は、学生にとってずいぶん履修しやすくなりました。

3. 課程修了者の進路

最初の卒業生は1991年度でした。一人は他大学の日本語教育を専門とする学科に入学しなおし、その後海外青年協力隊で日本語を教えたようです。今一人は熊本大学や学園大学などで日本語教師をしています。すでにベテランですね。1992年度に日本語教育研究室で卒業論文を書いた学生は6人でした。そのうち、二人が本学の大学院の第一期生として進学、日本語教育で修士号を取りました。一人は鹿児島島の専門学校の日本語教師になりました。1993年度には二人が大学院に進学しました。うち一人は当時の国文の卒業、もう一人は英文の卒業でした。1994年度卒業生は5人です。そのうちの一人は卒業後韓国の日本語学校に行きました。一人はアメリカの大学の大学院に、もう一人は民間の企業に就職しましたが、現在は久留米にある日本語学校で専任をしています。この年、初めての大学院修了生が出ました。一人が韓国の大学へ外国人教師として赴任しました。

1995年度の卒業生は日文が2名、英文が2名でした。英文卒業の二人は韓国の日本語学校へ行き、そのうちの一人は日本語学校から韓国内の大学へ、そして現在は日本国内の大学で博士課程に在籍しています。専門は日本語教育です。1996年度は3人の学生が韓国へ行きました。大学院の修了生は4人いて、一人は韓国の姉妹大学である祥明女子大スクールへ行きました。1997年度は2名が大学院に進学、1名が嘱託として大学に残り、翌年進学しました。修士修了は1名で米国の姉妹大学であるモンタナ州立大学へ日本語を教えに行きました。1998年度の学部卒業生は4名、一人が韓国の日本語学校に職を見つけて、行きました。

1999年度に日本語教育研究室で卒業論文を書いたのは1名だけでした。本学の大学院に進学し、引き続き日本語教育を専攻しました。修士修了は2名で、国内の日本語学校の非常勤と韓国祥明大スクールの外国人教師とです。2000年度は5名が卒業し、国内

の日本語学校の専任が3名、そして、海外青年協力隊で一人が中国へ行きました。修了者は5名で、国内の日本語学校専任、高校の国語科の教師、日本語学校非常勤、韓国祥明大校、韓国の高校、それぞれ1名ずつです。

2001年度は3名でした。私は何も協力しませんでした。3名それぞれが国内の日本語学校の非常勤、中国の大学、米国インターンシップと日本語教育関連の進路を見つけてきました。修了生は1名だけで、県の嘱託をしながら進学の準備をし、現在は他大学の博士課程に在籍しています。

2002年度の卒業生は4人です。二人は本学の大学院に進学、一人は他大学の日本語教育の大学院に進学、一人は中国にある中高一貫の外国語学校に行きました。

一人一人の学生がそれぞれの夢を追い、実現させています。

4. 教育実習について

「日本語教育課程」の開設は1988年度からでした。1988年の4月に入学していた学生が3年生になった1990年から、「日本語教育実習」が始まりました。通年の選択科目で2単位でした。日文科のカリキュラムの変更に伴い、1999年度からは「日本語教育演習」と名称を改め、通年4単位の科目となりました。これも選択科目です。「日本語教育演習」を履修しなくても課程は修了できます。

1989年に韓国祥明女子大校（現在は共学で祥明大校と改称しています）と姉妹締結が結ばれ、翌年の1990年から日語日文科に実習生を送ることになりました。初年度は17日間、11名を送りました。

実習のやり方はこの頃から変わっていません。実習校の学生に合わせて、日本で授業を作っていきます。日本国内の国語科の教育実習だったら、実習させてもらう学校のカリキュラムに合わせて、授業の流れの中に入って行くのですが、本学の日本語教育実習ではそうはしません。受け入れ先の授業の流れを日本にいて把握し、4月から指導をはじめるのは至難のわざだからです。かといって、実習の指導を相手大学に頼むわけにもいきません。

また、日本語教育には世界共通の指導要領や教科書が存在するわけではなく、国籍も日本語学習の目的もバラバラな学習者に合わせて、教育内容を考えなくてはけません。だから、日本語教師というのは、自分で教材を作る能力も必要です。実習先の教育機関からは教室と学生とを借りるだけで、教える内容や教材はすべて日本で作って持っていきます。

1990年からは12日間で、12名、1991年には16名でした。1992年から現在までは10日間です。実習は50分の授業を2回です。2回は同じ内容で、教える対象の学生が違います。1回目の授業の反省を2回目に盛り込むようにしています。1993年以降は8名、14名、19名、12名、11名、5名、2名、12名、8名、6名、そして2003年度は8名でした。

1998年からは中国の広西大学にも送っています。受け入れ先は外国語学部日語学科です。初年度は11日間で、2名でした。次の年も11日間で、4名でした。広西大学は中国の広西壮族自治区にあり、かなり遠いので実習期間も韓国より長くなります。2000年、2001年はともに15日間、7名で、2002年は12日間、11名でした。

両大学とも、実習の対象は日本語を専攻する学生で、主に3年生です。韓国に行く実習生は祥明大学校の学生の家にもホームステイをします。大学への行き帰りはもちろん、ショッピングや食事なども彼らと一緒に、韓国人の生活習慣をつぶさに見ることができます。中国は大きな国で、大学はたいてい全寮制です。広西大学に行く実習生はキャンパスの中にある宿泊施設に滞在します。学生が食事や買い物その他に連れて行ってくれるのは同じです。こちらは、基本的にキャンパスの外に出ることがないので、滞在中は自分の意思で自由に動くことができます。

4月から準備を始め、韓国は10月の末から11月の初め、中国は11月中旬に実施します。実習はビデオカメラにおさめ、帰国するとそのテープをおこし、教室で発表します。その発表での質疑応答を盛り込んだものを報告書として提出し、その報告書で評価を行ないます。

「日本語教育演習」は2年生から履修でき、3回までならずべて単位となります。実際に2年生のときから毎年実習に参加した学生がいます。はやくに経験できるので、その後の勉強の動機付けになるし、繰り返し行けるので希望者は経験を積めます。また、海外での滞在経験は日本語教師にとって必ず役に立ちますし、実習先へのおみやげを買ったり、航空券の手配をしたりもするので、これら全体がいい経験となるでしょう。毎年、必ず行っているのも、相手の大学の教員、学生とも知りあい同士となります。この人的交流の蓄積も大切な財産です。

2001年の春休みに黒髪小学校でこども日本語教室を開きました。黒髪小学校は熊本市内に住む日本語教育を必要とするこどもたちのセンター校で、学期中は市内の小中学校から黒髪小学校に勉強しに來たり、黒髪小学校の担当の先生が指導員を各校に派遣したり、ご自分でいらしたりしています。長期休暇は日本語の指導がなかったので、

それを埋めようということになり、本学の学生数名が春休みの4日間、黒髪小学校に行きました。その後、春休みや夏休みに日本語教室を開くようになり、今年度、2003年度から正式に教育実習に組み込みました。今年度は8月25日の月曜日から29日の金曜日までの5日間、6人の実習生が参加しました。じっとすわっていることのできない小学生や、受験を間近に控えた中学生など、今後こういった実習をしていけばいいのか、どんな授業を準備すべきなのか、悩んでいるところです。

大学生に教える場合には、すでに身につけている母語の力を外国語である日本語に置き換えていく作業が必要なのですが、とくに小学生の場合、母語の力、基本的な言語力自体が未完で、その言語力を外国語である日本語で養わなくてはならないという事情があります。

この実習では、クラス分けや、教材選び、授業内容だけではなく、戸締り、机の並べ替えなどのすべてがまかされます。とてもいい勉強になったと思います。

海外にもいけなし、夏休みにも時間が取れなかったなら、模擬授業をします。通常の教室で、同じ授業を履修している日本人の学生相手に授業をします。実習生は努力するのですが、やはりいま一つ気合いが入りません。また、授業だけの実習になってしまい、授業を実現させるためにビザを取ったり、小学校まで出向いたり、という作業をしないままになってしまいます。

2003年度からはタイ国ワライラック大学にも送りました。できて5年目の新しい大学で、11月26日から12月5日の10日間でした。今までとは違い、漢字を知らない学生が対象となります。また、日本語学科がない大学で、学生は日本語を専門としていません。

大学院の教育実習の科目名は「日本語教授法実習」で、1993年度から半期、2単位の科目としてスタートしました。

学生が個人的に教えた授業を報告することで実習としていたこともありましたが、1999年度から、祥明大から来学した短期研修団に対して授業を行なわせ、それを実習としています。6月の終わりから7月の始めにかけて来学し、そのうちの5日間はキャンパスにやってきて授業を受けます。5日間の午前中2時間、計10時間が日本語の授業です。研修団の来学自体は1990年度が第1回ですが、大学院の実習として単位化したのは1999年度からです。大学院生が少ない場合は、学部の学生にも手伝ってもらっています。

5. 文学部の日本語教育の学生が行なっている日本語の教室

本学には、教育実習以外にも日本語を教える場がいろいろあります。狭い意味でのカリキュラムは用意されたいくつかの科目だけですが、カリキュラムを広い意味でとらえれば、かなり豊富なプログラムが用意されていることになります。

モンタナ州立大学のボーズマン校とピリングス校とは1997年度に交流協定が結ばれました。ピリングス校からは2002年度から短期研修団が来学しています。5月の5日間、毎朝60分1コマの授業を大学院生が中心となり、学部生も交えて教えています。このコースで教える場合には大学の後援会から謝金が出ます。

熊本市には国際交流振興事業団という財団法人があり、国際交流会館で外国人向けの日本語教室を開いています。年に3コースで、1コース8回の授業です。以前は、この3コース全部を本学で引き受けていたのですが、2003年度から1コースだけになりました。謝金ありです。

熊本には華友会という、在日中国人に対するボランティアグループがあります。このグループは毎週木曜日と土曜日に、熊本県立大学で日本語教室を開いています。何人かの学生はその手伝いをしています。

学生のサークル活動に国際クラブというサークルがあります。国際交流や日本語教育に興味のある学生が集まっていて、留学生のためのパーティーや短期研修団を受け入れたときの歓迎会などを企画運営しています。そうやって留学生に接したり、外国人と交流したりすることに慣れておけば、日本語を教える時に役に立つことでしょう。

6. さいごに

この文章は在学生よりも卒業生、その中でもかつて日本語教育課程で学んだことのある方を想定して書きました。隔世の感があることと思います。実践的な経験を積む場と機会がふえただけでなく、授業内容も改善されていますし、集中講義で現代日本語の先生を招くようにもなりました。

学生は意欲旺盛であり、目的意識もはっきりしています。彼らは、大学の授業、演習、教育実習、上記のようなプログラムや行事を通して、実践的でパワフルな能力を身につけようとしています。

今後とも、熊本県立大学日本語教育研究室にご注目ください。